

氏 名	須賀 あゆみ		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を()を付して記入すること。)		
	相互行為における指示表現		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
内 容 の 要 旨			
<p>本論文は会話分析の手法を用いて、日本語の指示表現の選択のしくみを明らかにするものである。会話において話し手は聞き手の反応をみながら発話や行動を調整している。近年の言語研究において、会話を「相互行為」と捉える視点が注目を集めている。「あれ」や「その」といった各種の指示表現がどういう要因で選択されるのかについて、実際の会話を観察すると、従来の談話分析では捉えきれない現象があることに気づかされる。本論文が採用する会話分析は、トランスクリプト(「A:あの……ハリケーンって>あるでしょう</B:>うん<う::ん /A:あれが近くに来てるから」等のように合槌や沈黙を含め実際の会話の様子を写し取ったもの)を用いて、言葉や文のつながりを越えた会話のダイナミズムに着目し、指示を相互行為の一環として捉えるものである。この会話分析の方法論を用いると、従来の談話分析では説明困難な事象も記述でき、むしろそういった一見不可解な現象こそが指示表現の選択指針を解明する手がかりになりうる。本論文は、日本語の指示現象を、会話分析の手法を用いて「相互行為」の視座から分析し、話し手が何を拠り所にして指示表現を選択しているのか、また「有標な指示」の効果は何か、を明らかにすることを目的に、以下のように議論を進める。</p> <p>第1章では、用語の定義と分析の基盤となる概念を整理し、従来の談話分析における指示研究の問題点を指摘すると共に会話分析の視座に基づく研究の意義を確認する。具体的には、i)「指示」の定義として「人物、場所、時間、その他の存在を示すカテゴリーに意識を向けさせること」(Enfield 2012)を採用し、人物・場所・ものを指示する現象を扱うこと、ii) 指示現象には、①話し手が特定の指示対象を聞き手に認識(唯一的に同定)するように促す現象と、②聞き手が知らないと想定する特定の指示対象の存在に意識を向けさせる現象を含むものと、このような意味での「指示」を行うために用いられる表現を「指示表現」と呼ぶこと、iii) 会話の中で話し手は、聞き手の知識に関する想定を確認・調整しながら適切な指示表現をデザイン(選択)しており、この側面は、会話が問題なく進行する限りにおいては顕在化しないが、聞き手が指示対象を適切に認識・理解することが困難な状況が生じたとき、その問題に対処するための手続き(指示活動のプラクティス)を記述することによって、話し手が何を拠り所として指示表現を選択しているのかを検証できること、を確認する。</p>			

第2章では、会話分析の手法を用いた先行研究の成果を概観し、第3章以降で扱う合計6タイプの指示活動のプラクティスを簡潔に導入する。これらは指示表現の現れる位置によって大きく2種類(I 最初の指示位置で行われる指示(含4タイプ)とII 後続指示位置で行われる有標な指示(含2タイプ))に分けられる。各プラクティスを第3章以下で順に検討する。

第3章では、I-1)「指示対象の認識を確認するプラクティス」(話し手の意図した指示対象を聞き手が唯一的に同定可能であるという話し手の想定を確認するプラクティス)に焦点をあて、日本語でも Sacks & Schegloff (1979)の「聞き手に合わせたデザインの選好」(可能ならば認識用指示表現を用いよ)と Schegloff (1996)の「名前の選好」(名前で聞き手が指示対象を認識できると想定されるなら名前を用いよ)にそって指示表現が選択されることを検証した。

第4章では、話し手が指示表現を選択する指針としてカテゴリー・タームに関する選好が存在することを明らかにし、I-2)「カテゴリーの知識を調べるプラクティス」(指示対象を表すカテゴリー・タームの意味を聞き手が理解可能かどうか調べるプラクティス)の観察結果に基づいて、「タームの選好」(可能ならカテゴリー・タームを用いて指示するのがよい)という新たな指針を提案した。

第5章では、I-3)「言葉探しを伴う指示のプラクティス」(話し手が指示対象の名前やカテゴリー・タームを思い出せないとき、聞き手と協働で指示表現を探索するプラクティス)の事例をもとに、「聞き手に合わせたデザインの選好」「名前の選好」「タームの選好」の3指針が裏付けられることを示した。

第6章では、I-4)「聞き手が知らない対象の存在を知らせるプラクティス」を用いて、1) 指示対象がある場所に存在するということを告知する活動や、2) 会話の話題に上ったカテゴリーの一員を紹介する活動がなされることを記述し、聞き手が知らないと想定する対象に言及する際には、話し手は聞き手の既存の知識と関連付けて指示対象の理解を促し、かつ会話活動を成し遂げられるように指示表現をデザインしているということを明らかにした。

第7章は、物語を語るという会話活動に焦点を当てる。指示表現のデザインが物語の聞き手の理解に貢献することを示し、指示活動が会話活動を成し遂げるために実践される側面を例証する。とりわけ「名前披露」と本論文が命名する独特のプラクティスの存在を指摘し、その機能を提案する。II-1)「名前披露」とは、聞き手が知らない対象の名前を後続指示位置で告知する、例えば、物語に登場する人物を、最初に「友達」というカテゴリー・タームを用いて導入し、再指示する際に「このみっていうんだけど」のように、後から名前を知らせるプラクティスである。この名前披露は、聞き手に物語の主眼(山場)は何であるかを適切に理解させ、物語をどのような立場で聞くべきかを誘導するという点で、物語を語るという活動を成し遂げるのに大きく寄与していることを主張した。これは、指示表現が単なる指示以上のことを成し遂げる「有標な指示」である(Fox (1987), Schegloff (1996))。

第8章では、II-2)「直示表現の再使用」のプラクティスを提案する。これは、例えば、同居中の息子一家の海外移住に対して「わたくしをどうしようかと思って」と自称詞「わたくし」を用いた母に対して、同じ直示表現を用いて『わたくし』はついていくしかないでしょ」(「わたくし」=(母))と助言を述べるような場合のように、先行話者(母)が用いた直示表現と同じ形式(「わたくし」)を、後続話者(娘)が再度用いて同一の対象(母)を指示する「有標な指示」の事例である。このプラクティスは、会話参加者間に笑いが生まれ、後続話者が先行話者のスタンスにコミットせずに意図した活動を遂行することができるという点で、会話活動の達成に寄与することを指摘し、このような「有標な指示」の選択は、指示表現が会話活動を達成するためにデザイン(選択)される側面を証拠づける事例となることを主張した。

第9章は、本研究の示唆することと今後の課題のまとめである。本論文では、様々な指示表現のプラクティスを観察・分析することによって、1) 指示対象に関する聞き手の認識や理解は、指示を相互行為の一環としてみなすことによって説明可能となる現象であり、指示には言語形式上の結び付きという観点では捉えきれない側面があること、2) 話し手による聞き手の知識の想定が会話の進行とともに変化するという動的視点を加味することによって、会話参加者がお互いの知識に関する想定を調整しながら指示対象の認識や理解を確立していく実践の中に指示表現の選択指針を見出すことができることを主張した。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名	須賀 あゆみ		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を()を付して記入すること。) 相互行為における指示表現		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
要 旨			
<p>「あれ」や「その」といった各種の指示表現がどういう要因で選択されるのかについて、実際の会話を観察すると、従来の談話分析では捉えきれない現象があることに気づかされる。本論文が採用する会話分析の手法は、ビデオ等を駆使し、発話の重複を捉え沈黙をコンマ秒単位で計測するテクノロジーの発展の結果可能になったもので、会話のダイナミズムに着目し、実際の会話の様子を写し取ったトランスクリプト(「A:あの:::ハリケーンって>あるでしょう< /B:>うん<う::ん /A:あれが近くに来てるから」等)を用いて、指示を相互行為の一環として捉える。この手法を用いると、従来の談話分析では説明困難な一見不可解な現象が指示表現の選択指針を解明する手がかりになる。本論文は、日本語の指示現象を、この会話分析の手法を用いて「相互行為」の視座から分析し、話し手が何を抛り所にして指示表現を選択しているか、また「有標な指示」の効果は何か、を明らかにするものである。</p> <p>第1章は、従来の談話分析の問題点を指摘し、用語・概念を整理した上で会話分析の意義を確認する。具体的には、i)「指示」の定義として「人物、場所、時間、その他の存在を示すカテゴリーに意識を向けさせること」(Enfield 2012)を採用し、ii)指示現象は、①話し手が特定の指示対象を聞き手に認識(唯一的に同定)するように促す現象と、②聞き手が知らないと想定する特定の指示対象の存在に意識を向けさせる現象を含み、この意味での「指示」を行う表現を「指示表現」と呼ぶこと、iii)話し手は、聞き手の知識に関する想定を確認・調整しながら適切な指示表現をデザイン(選択)しており、聞き手が指示対象を認識・理解することが困難な時、その問題に対処するための手続きを記述することによって、話し手は何を抛り所に指示表現を選択しているのかを検証できることを確認する。談話分析の先行研究の問題点の指摘は妥当で、会話分析の手法を用いた研究へ移行する意義説明は明快で納得できる。</p> <p>第2章は、会話分析の手法を用いた先行研究の概観と第3章以降で扱う6タイプの指示活動のプラクティスの簡潔な導入である。これらのプラクティスは、指示表現の現れる位置によって大きく2種類(I最初の指示位置で行われる指示(含4タイプ)とII後続指示位置で行われる有標な指示(含2タイプ))に分けられ、第3章以下の論文構成が示される。</p>			

第3章は、I-1)「指示対象の認識を確認するプラクティス」(話し手の意図した指示対象を聞き手が唯一的に同定可能であるという話し手の想定を確認するプラクティス)を対象に、日本語でも、Sacks & Schegloff (1979)の「聞き手に合わせたデザインの選好」と Schegloff(1996)の「名前の選好」にそって指示表現が選択されることを検証した。

第4章は、I-2)「カテゴリーの知識を調べるプラクティス」に関する新しい指針を提案する。指示対象を表すカテゴリー・タームの意味を聞き手が理解可能かどうか調べるプラクティスの観察結果に基づいて「タームの選好」(可能ならカテゴリー・タームを用いて指示するのがよい)という指針の存在を指摘し提案した。「名前の選好」との並行性が明確に示されている。

第5章は、I-3)「言葉探しを伴う指示のプラクティス」(話し手が指示対象の名前を思い出せないとき、聞き手と協働で指示表現を探索する)の事例を元に、「聞き手に合わせたデザインの選好」「名前の選好」「タームの選好」の3指針が裏付けられることを示した。本章内容は、日本英語学会第32回大会で発表され *JELS* 32(査読有)に掲載されている。

第6章は、I-4)「聞き手が知らない対象の存在を知らせるプラクティス」を用いて、聞き手が知らない対象に言及するには、話し手は聞き手の既存の知識と関連付けて指示対象の理解を促し、会話活動を成し遂げられるように指示表現をデザインしていることを明らかにした。

第7章は、物語を語るという会話活動に「名前披露」と本論文が命名する独特のプラクティスが存在することを指摘し、その機能を提案する。II-1)「名前披露」とは、聞き手が知らない対象の名前を後続指示位置で告知するプラクティスで、例えば、物語に登場する人物を「友達」というカテゴリー・タームを用いて導入し、再指示の際に「このみっていうんだけど」と後から名前を知らせるプラクティスである。この名前披露は、聞き手に物語の主眼(山場)を適切に理解させ、物語をどのような立場で聞くべきかを誘導する点で、物語を語るという活動の達成に大きく寄与していることを主張した。豊富な事例からカギになるパターンを指摘抽出する証拠提示が的確で、その主張には説得力がある。本章内容は部分的に、第4回国際会話分析学会(the 4th International Conference on Conversation Analysis)他の口頭発表で高く評価され、*Studies in European and American Language and Culture* 2に掲載されている。

第8章は、II-2)「直示表現の再使用」のプラクティスを提案する。例えば、同居中の息子一家の海外移住に際して「わたくしをどうしようかと思って」と自称詞「わたくし」を用いた母に対して『わたくし』はついていくしかないでしょ」と返答する場合のように、先行話者(母)が用いた直示表現と同じ形式(「わたくし」)を、後続話者(娘)が再度用いて同一の対象(母)を指示するプラクティスである。この事例では、会話参加者間に笑いが生まれ、後続話者が先行話者のスタンスにコミットせずに意図した活動を遂行できることから、このような「有標な指示」の選択が、会話活動を達成するために指示表現がデザイン(選択)される側面を証拠づけることを主張した。この指摘は、言語使用の二元性(記述的使用と帰属的使用)を証拠づけるもので、言語の本質的特性を明らかにするものであると高く評価できる。本章内容は第24回社会言語科学会で口頭発表され、『日本語学論説資料』47に掲載されている。

第9章は、本研究が示唆することと今後の課題のまとめである。

人が行う対面会話は本来的に、ことばと共に表情やジェスチャー・視線等を伴う。近年注目されている会話分析は、会話の状況を動画として記録し、会話のダイナミズムを正確に反映するトランスクリプトに基づいて分析を行うもので、ことばを超えたコミュニケーション学と見なすべき領域である。本論文は、指示に関する長年の言語学的研究における問題意識を背景に、この会話分析の視座から、様々な指示表現のプラクティスを観察・分析し、「タームの選好」や「名前披露」「直示表現の再使用」等を提案することを通して、1)指示には言語形式上の結び付きという観点では捉えきれない側面があり、2)会話参加者が相互調整によって指示対象の認識や理解を確立していく実践の中に指示表現の選択指針を見出すことができる、とする主張は説得力がある。またその過程において、会話の流れからパターンを抽出するプロセスは非常に興味深く、その成果は言語とコミュニケーションの本質に迫るものであり、言語学の発展にも大きく寄与するものと高く評価できる。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士(文学)の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。